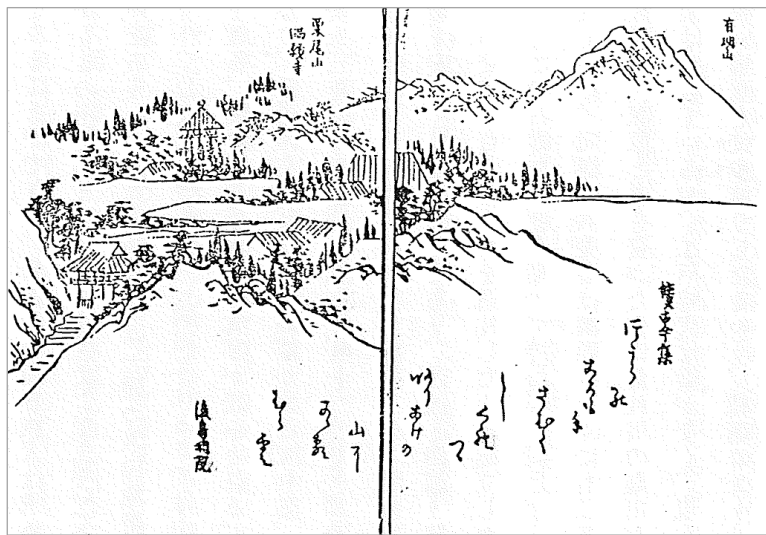


十辺舎一九 来訪二〇〇周年

文化十一年（一八一四年）、今からちょうど二〇〇年前の事、「東海道中膝栗毛」でおなじみの十辺舎一九がここ安曇野にやってきた。

目的はね。遊び方々「膝栗毛」の続編を書くための取材だった。一八〇二年に出した「東海道中」は大当たりで「弥次喜多」を四国まで足を延ばさせた。

この時、一九は金持ちだったむんで、松本の高美屋勘左衛門さんがたまたま一九と顔見知りだったことから、ここ安曇野へ誘って、善行寺街道を通らせようと頼んだってわけ



満願寺を描いた一九の絵（『続膝栗毛八編』）

だ。当時はもつとも売れっ子の作家だったむんで、大変な騒ぎだったじ。

それから約一カ月ここらを歩いて文化十一年八月にはここ安曇野へ来てさ、豊科の新田や牧の満願寺にも寄っただ。

満願寺には十日位泊まって、近くの松尾寺や宮城不動なんかも廻っただ。本文の中でも喜多八が旅人に「少しばかり廻り道になるが」と自分たちが見てきた三霊場には参詣するように勧める場面が出てくるだじ。

この山麓地域の訪問は、沢山のスペースをとって描写してるだいな。ありがてえことせ。あとはせえ、「やくやく」、「ねっから」、「ずら」なんかの安曇弁も登場するのも、面白れえねえ。

今となりあ、山麓地域は観光地として多くの人があるようになったけども、そのきつかけになったのは、この「膝栗毛」が世に出たこともあると思うじ。今、まさに来訪から二百年を迎えるこの良き年、十辺舎一九を讃える年にしてえもんだいねえ。

安曇野百選プロジェクトとは…

平成20年10月設立。景観、文化、風習など、地域に眠る財産を掘り起こし、市民主体で守り育てる活動を行っています。

インフォメーション

安曇野まちなかカレッジ

開催日 10月18日（土）～11月30日（日）

安曇野まちなかカレッジは、商店が行う一般講座（まちゼミ）と市民団体等が行う安曇野学講座の2つ。また、期間中は参加者が楽しめる文化祭も開かれます。

百選プロジェクト 企画イベント

穂高神社探検ウォークラリー

そば祭りの会場となっている穂高神社周辺を、地図を片手に歴史や文化に触れながら、楽しく散策します。

- 日時 11月16日（日）13時～15時
- 定員 先着100組（当日先着順 申込不要）
- 対象 小学生3年生以下は保護者同伴
- 集合 穂高神社内受付テント
- 参加料 100円

私の好きなビューポイント 「大糸線の風景写真展」

来年の穂高駅開業100周年を記念して、風景投稿サイト「ビューポイントあづみの」で市民から募集した大糸線の風景写真を展示します。

- 日時 11月1日（土）～24日（月）
- 場所 穂高駅待合室

- 問い合わせ 安曇野百選プロジェクト
(TEL 0263・82・3131)



安曇野 百選かわら版

発行：安曇野百選プロジェクト
編集長：等々力秀和

安曇野妖怪ウォッチ

んぐ



万水川の河童

穂高の万水川のほとりに御宮が二つある。昔々、白金地区の相馬安兵衛が万水川の土手に草刈りに行った。この辺りには河童がいて、いつも通行人を悩ましていただいね。その日も日が暮れて、安兵衛が帰ろうとした時、突然馬が驚いてはねだし、家に帰っちまった。家に帰ると、なんとんまあ、河童が馬の尾っぽに噛みついていただ。安兵衛は河童を捕まえてえさなかつたら、河童は悪かったと詫び、もみ医者術を教えたじ。それから安兵衛と親類の相馬喜右門はもみ医者となり名医と言

われた。そして二人は祠を建てて河童を祀った。今はもう医業はなくなっているが、祠はまだあるじ。

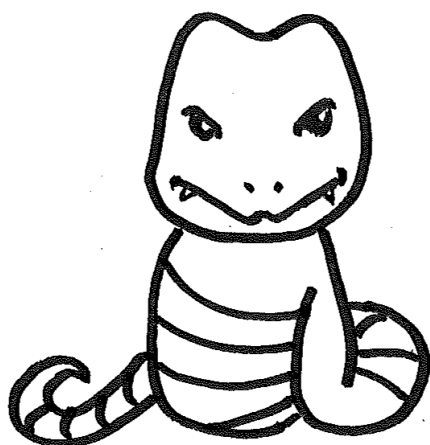
満願寺の鬼火

昔々の話、牧の栗尾山満願寺の北に小さな祠があっただいいね。その近くに大きい杉があつて、お勤めとして住職は丑満どきにこの祠の中に御灯火をつけるしきたりがあつた。ところが住職は夜、おつかねえむんで、小坊主にそれをさせつと思つただいいね。けんども小坊主は十歳位だむんで、おつかねえつて途中でけえつて来ちまつただいいね。そんな事がひとつきり続いたむんで、住職が小坊主を杉の



木にしぼつて法事に出かけたが、その留守に火事になって小坊主は死んじまつた。住職はさすがに不憫に思つて小坊主をねんごろにとむらい、自分はそのまま巡礼の旅に出たつきり帰つてこなんだじ。そして、今は山の下の方に満願寺があるが、元の場所の杉の木の下には雨の降る日には怪しい火の玉がゆらゆら燃えるということだじ。

お玉柳



南穂高重柳には、お玉柳という所があつて。今でも大きな柳が数本生えてるだいいね。重柳には、お玉という美女がいただじ。とても働きもんで疲れて柳の下で昼寝をしてた所へ草むらの中から蛇が現れて娘の身に乗り、お玉は絶命してしまつた。なんてことだいいね。そこで、重柳の衆はここをお玉柳つて言つて吊つて、そこには近づく者がいないそう